

森のちやれんがニュース

2018夏

Newsletter vol.12



第11回企画テーマ展 『野幌森林公園いきもの図鑑』を開催

2018年4月27日～6月3日を会期に、第11回企画テーマ展『野幌森林公園いきもの図鑑』を開催しました。

野幌森林公園は、大都市近郊に残る森林として世界的にも貴重なエリアで、道立自然公園指定50周年を迎えました。また、当館では、一般市民や外部の専門家と連携し、研究プロジェクト「野幌森林公園の生物インベントリー調査」を継続して進めてきました。

今回の企画テーマ展では、当館の所蔵する野幌森林公園の植物や昆虫の標本を展示し、最新の研究成果を紹介し

ました。展示標本数は、脊椎動物70点、植物250点、昆虫は17,289点におよびます。

顔を寄せてじっくり観察するお客さまの姿が、しばしば見受けられました。



展示制作でも市民の方々の協力をいただきました



CONTENTS

- ② 収蔵資料紹介
亜麻150年の歴史とバイオリン播種器
- ③ 総合展示室の資料紹介/第1テーマ
北海道初のナウマンゾウの足跡化石
- ④ 研究活動紹介
誰かの「あたりまえ」を聞き、書き、伝える
トピックス
- ⑥ ワークシート開発プロジェクト始動！
より利用しやすくなった北海道開拓の村
アイヌ民族文化研究センターだより
- ⑦ 公開研究報告会「余市のアイヌ文化を考える」を開催しました
- ⑧ 活動ダイアリー

収蔵資料紹介

亜麻150年の歴史とバイオリン播種器

山 際 秀 紀

研究部生活文化研究グループ 学芸主査

現代では、石油が原料の服などは当たり前で、天然素材の方が高級品となっていますが、今から50年ほどさかのばれば、動植物など自然からとった原料の繊維で布製品をつくるのが当たり前でした。特に、亜麻は丈夫でしなやかな特長から、帆布、ホース、服などさまざまな用途で活躍していました。

繊維をとる亜麻の品種は、寒冷な北海道に適していたため、かつては全道各地で栽培されていました。

北海道における亜麻栽培は、慶応3(1867)年にロシア船から種子(栽培の解説書付き)を贈られた箱館奉行所が、大友亀太郎に御手作場(現在の札幌市東区)での栽培を依頼したこと、また同年にガルトネルが七重の農場(現在の七飯町)で栽培したことに始まるといわれています。

しかし、後の開拓使はお雇い外国人の進言を受け、ロシアやアメリカなどから亜麻の種子を取りよせましたが、製線技術が追いつかず、定着はしませんでした。その後、1887(明治20)年に北海道製麻が設立され、1889(明治22)年にベルギー人のオイブレヒトを招いたのち、漸く製線技術が確立し、亜麻栽培も定着していきました。

初期の亜麻栽培は手まきが一般的で、開拓使の時代から人力の播種器が輸入されていました。カフーン式(アメリカの考案者名による)は、縦回転の羽根で遠くに飛ばすのが特長で、古くは七重官園の報告(1879年頃)に見られます。また、1913(大正2)年には札幌興農園が輸入品を13円50銭で、1935(昭和10)年には五番館が自社製造品を1台12円で販売しています。

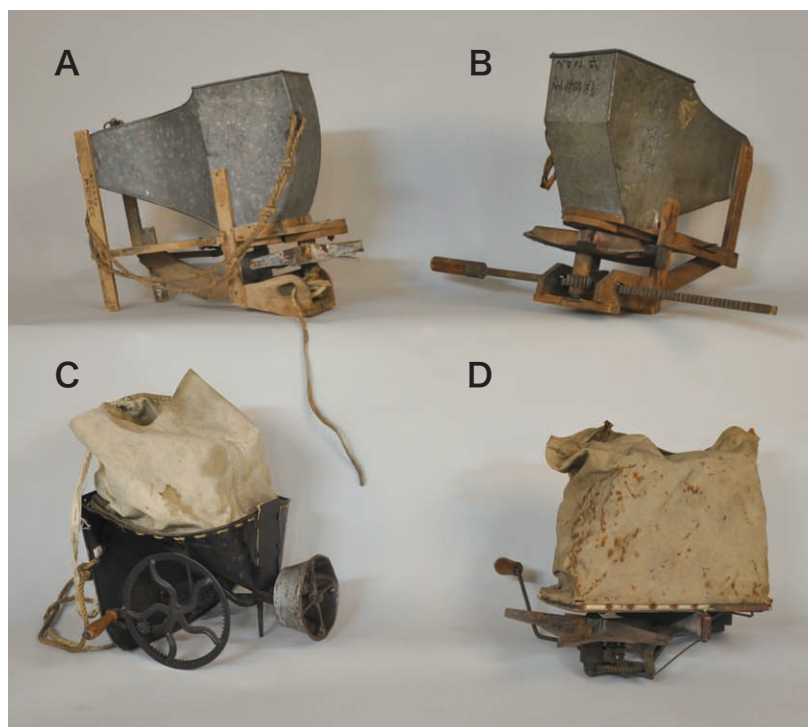
一方、サイクロン式(大暴風雨の意から)は、横回転の羽根で広くばらまきます。そして、サイクロン式と構造は同じですが、弓を左右に動かすようにして播種するものを「バイオリン播種器」と呼んでいます。バイオリン播種器は、1907(明治40)年、鈴木鈴馬(帝国製麻)がベルギーから1台導入したのが最初であるといえます。このタイプの播種器は、西洋では木枠に布の袋がつくのが一般的な形であるのですが、北海道では製麻会社が農家への普及を図り、ブリキ製(木製もあり)の箱が取り付けられました。

北海道以外ほとんど見られないバイオリン播種器ですが、弓に弦を張ったもの、弓と軸の接点に鉄製の歯を取り付けて歯車としたもの、弦だけのものなど、その形態はさまざまです。



亜麻播種器「フィドル」図
北海道農事試験場彙報第31号
『亜麻』1924年より

※「フィドル」とは、バイオリンとよく似た民族楽器の英語名称で、アメリカ製の「バイオリン播種器」の名称としても使われました



手動式の亜麻・牧草播種器 北海道博物館所蔵

- A バイオリン播種器(弦型)、亜麻用
- B バイオリン播種器(弓歯型)、亜麻用
- C カフーン式播種器、牧草・亜麻用
- D サイクロン式播種器(開拓使払い下げ品)、牧草・亜麻用

総合展示室の資料紹介/第1テーマ

北海道初のナウマンゾウの足跡化石

添 田 雄 二

研究部自然研究グループ 学芸主査

ナウマンゾウは、約35万年前に当時陸地となっていた対馬海峡を通して大陸から日本に渡ってきたゾウで、数千個の化石（主に歯）が発見されています。北海道ではこれまで約12万～3万年前の化石が5例報告され、そのうち1969（昭和44）年に十勝地方の忠類村（現幕別町忠類）で発見された化石は、全身の多くの骨が残された1頭分の化石でした。そのため、その復元骨格模型は当館を含め全国21もの博物館等で展示されています（実物は当館収蔵庫で保管。一部は入れ替え展示で公開）。

2008（平成20）年に忠類のナウマンゾウ発見地を総合地球環境学研究所らと調査した際、重機で掘った深さ数mの穴の壁全体（1969年発見の化石が埋まっていた位置の下）に、複数のくぼみ状の構造を確認しました（写真1の矢印）。これらは足跡と推定されたた

め、壁面の一番下に位置していたくぼみを平面で確認し、中の砂礫を取り除いて、石膏で型を取りました（写真2）。その後、足跡化石専門家の岡村喜明氏がこの石膏型を分析した結果、ゾウの蹄の跡と考えられる複数の弧状の突出部が確認されたのです*。

年代は火山灰などの分析で約12万年前とわかり、北海道初のナウマンゾウの足跡化石であることが明らかとなりました（北海道でこの時代に生息していたゾウはナウマンゾウだけ）。さらに、2つの足跡（前足と後ろ足）が重なっている可能性も判明し、この地を確かに歩いていたナウマンゾウの姿が浮かびあがってきたのです。総合展示では、この石膏型と壁面から転写した別のくぼみの断面（地

層剥ぎ取り）標本などを展示しています。

2008年の調査では、12万年前よりも古い時代の火山灰の痕跡も見つけました。今後、さらに下まで掘ってこの火山灰を発見できれば、そして壁全体で見られたくぼみがその火山灰の近くでも確認できれば、北海道にナウマンゾウがいつ渡ってきたかを示す重要な証拠になるかもしれません。現在、再発掘調査の時期を検討していますが、忠類ナウマンゾウの発見50周年となる、来年2019年も候補の一つです。

※岡村喜明「ナウマンゾウ化石産地から産出した足跡化石」、化石研究会誌特別号、第4号に掲載（71-74頁）、2010年発行

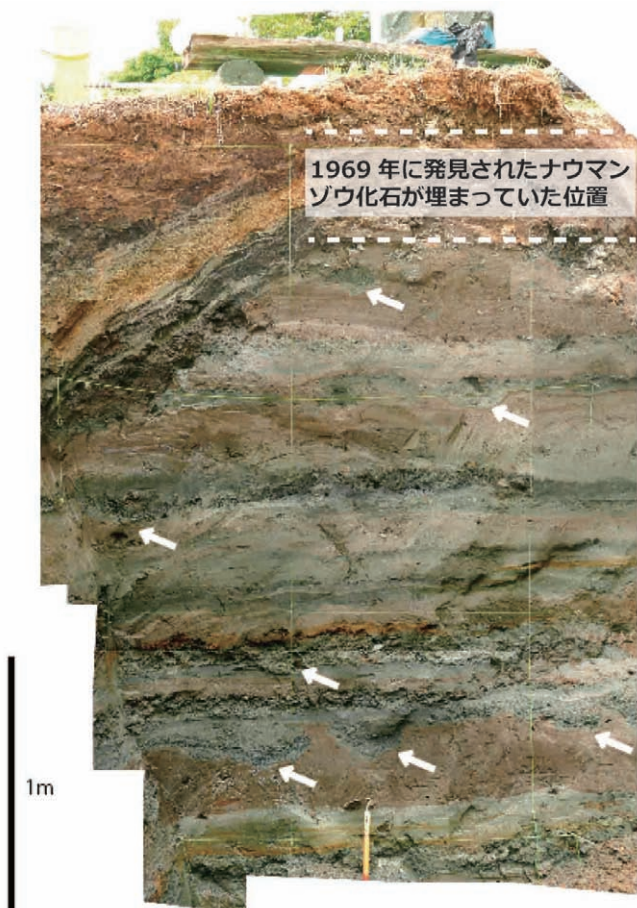


写真1 壁面で確認された複数のくぼみ状構造 幕別町忠類 2008年

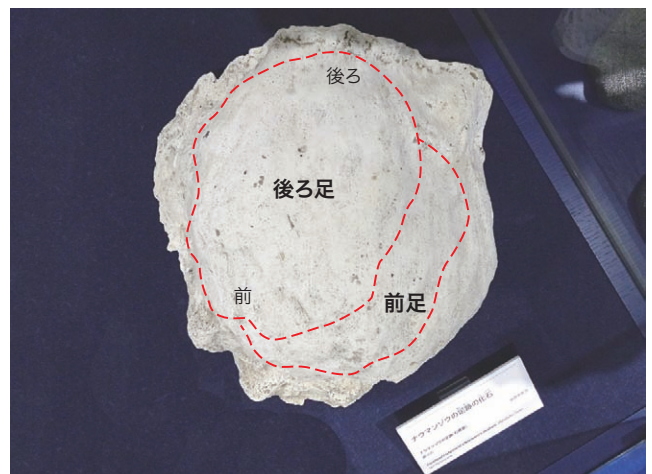


写真2 ナウマンゾウの足跡化石（上）とその石膏型の展示状況
足跡化石の写真は左右を反転してあります（石膏型と向きを合わせるため）。
赤の破線は分析結果にもとづく足跡の想像復元位置です。

研究活動紹介

誰かの「あたりまえ」を聞き、書き、伝える

尾曲 香 織

研究部生活文化研究グループ 学芸員



学芸員 尾曲香織

1987年、鹿児島県生まれ。
2016年より北海道博物館学
芸員。専門は民俗学。写真は、
十勝の清水町で八十八箇所巡
りについて聞き書きをしてい
るところ。

生まれてはじめての雪国での生活に不安を感じつつ、私は2016年の春に北海道博物館の職員となりました。これまでは静岡県や茨城県、宮城県や高知県などで主として人生儀礼（子どもの誕生や結婚、葬送など人生の節目に行われる儀礼）やそれにまつわる贈答をトピックとして民俗調査（聞き書きや史資料の調査など）を行ってきました。この目的は、各地の儀礼の特徴や家同士のつながり方、贈答品が贈り手と受け手あるいは地域の関係性の中でどのように存在しているか等を明らかにすることでした。

本州以南では10年ほど各地で調査を行いました。これまで北海道で調査をしたことはなく、着任後しばらくは報告書等を見ながら学ぶ日々でした。

そろそろどこかを自分で歩いて見てみたい…そう考えていた頃に、職場の人の「とりあえず行ってみたら」の声に押され、北海道で初めて調査に行ったのは奥尻町でした。

まずは基本的なことから、ということで奥尻町の学芸員稲垣森太さんの協力を得て、複数名に依頼し一年間の各家の行事や、人生儀礼に関する調査を行いました。

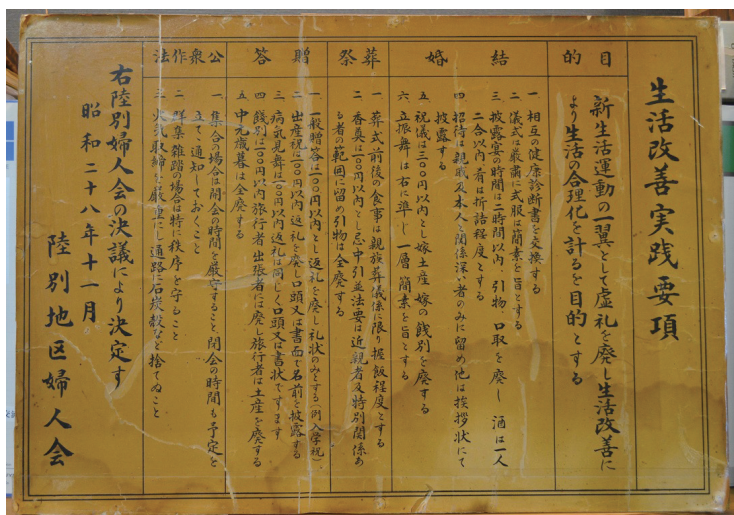
このときの聞き書きから、昭和40年代初頭頃までは家で結婚式を行っていたこと、集落によってはその頃まで青森県から嫁いでくる女性が多数いたことなどがわかりました。その後時代をくだるにつれ、結婚式は家ではなく公民館など公共の施設で、そして現在では島外の結婚式場を利用する人が多く

なりました。また、公民館などで結婚式を行うと同時に、それまでのような家同士あるいは個々人同士の関係性に応じて金額が変わるご祝儀制から、参加する人は一律で同額を支払う会費制へと移行したといわれています。なお、家から公民館へと場を移したことや会費制が提唱・実施されたのは「生活改善」の影響である、という話もきかれました。この「生活改善」は、冠婚葬祭などに関わるこれまでの慣習の中の無駄を省くものとされ、昭和20年代から全国各地で広がった新生活運動の一環として実施されたと考えられます。

奥尻町に限らず、北海道の結婚式といえは現在は会費制が主流ですが、これは他の地域では見られない傾向です。道外でも近年では会費制での結婚式について耳にすることもあります。一般的とはいいがたい状況です。私がこれまで調査してきた本州のとある地域でも、新生活運動の影響で、披露宴会場が家から公民館、そして現在はホテルなどの結婚式場へと移行したところは北海道と共通しています。ただし、会費制にしようとした形跡はあっても、実現したという事例はその地域では見つけられませんでした。会費制が実現しなかった理由として、それまでのつきあい（ご祝儀のやり取り等）の積み



奥尻町の花嫁が使ったかんざし 奥尻町教育委員会所蔵



陸別町の新生活運動の要項 個人所蔵



行商で使われていたそり 岩内町郷土館所蔵

重ねがあり、自分たちが相手からもらったものと同等のものを返す必要があるため、それをすべてなかったことにして会費制にするのは難しいという問題があったようです。

上記の事例から、北海道で会費制の結婚式が実現した理由を推測することはできませんが、地域の状況を踏まえて結論を出した報告はありません。この疑問を明らかにするため、私は道内のなるべく多くの地域で会費制以前の結婚式と会費制結婚式と比較し、それぞれの特徴を捉えたいと考えています。現在までいくつかの地域で会費制が始まった時期や招かれる人数の変化等について聞き書きを行ったり、陸別町では町内のある人がかつて出席した数十件の結婚式の席次表を見せてもらい、出席した人数や式次第、会費制の場合には会費の変遷を追ったりしています。この結果は、現在報告する準備を進めています。

また、この2年ほどの間に、もともと目的としていたこと以外にも様々な話を聞くことができました。行商はその一例です。新十津川町や倶知安町といった内陸の地域では、小樽など海岸沿いの地域から鉄道を利用し、ガンガンあるいはカンカンと呼ばれる一斗缶

を半分にしたような金属製の缶を背負って魚の行商にきた女性がいたそうです。岩内町のある男性は昭和30年代頃に岩内線がこのガンガンを背負い内陸部に向かう女性たちで一杯だったことや、そのために当時車両の中に魚のにおいが充満していたことを話してくれました。これらは、まさに当時経験した人だからわかることでしょう。魚の行商については北海道の海岸部と内陸部とのつながりや、内陸部における食生活のありかたの一端を示す重要な問題です。いずれの地域でも現在魚の行商人はいない、と聞いています。当

時の話が聞ける今のうちに急ぎ調査を進めたいと思っています。

さて、私の調査の主な方法は聞き書きです。人の話を聞いて書き残すため、様々な人にお話し、お話しをしてもらいます。そのときによく問われるのが「こんな話でよかったのか」ということです。その内容を「話した自分にとってはあたりまえのこと」と感じているのでしょうか。でも、そのあたりまえはある程度限られた地域の限られた時期に経験されるものです。他の地域で生まれ育った私には「あたりまえ」ではないですし、お話ししてくださった方と同じ地域で暮らしている人でも、世代が違えばわからないこともあります。そういったことを知ることは、自分たちについて振り返る機会や、これから考えるためのものさしを得ることにともなわれます。私は誰かの「あたりまえ」を、その人の心情をも含めながら異なる世代の人や、異なる地域で暮らす地域の人たちに伝えたいと思っています。博物館にはそれを展示する場があり、資料としてのモノが保管され、それにまつわる情報が蓄積されています。今行っている調査を踏まえ、いつか皆さんにその成果を展示で伝えられるよう努めます。



積丹町での冬のお祭り調査 2017年1月16日

トピックス

ワークシート開発プロジェクト始動！

「たんけんバッグ」と呼ばれるひも付きボードを首から提げた児童が、展示物の前で、何やら熱心にメモしています。先生が作ったワークシート（見学のしおり）を使って、「調べ学習」をしているのです。

——このような光景が、特に2学期がはじまる8月最終週から10月はじめごろまで見られます。多くの小学校4年生で展示場が賑わい、1日で1,000人をこえることもあります。

当館には、年間約2万人の児童・生徒が、学校の団体見学として訪れます。展示をぶらぶら眺め、ちょこっと興味のあ



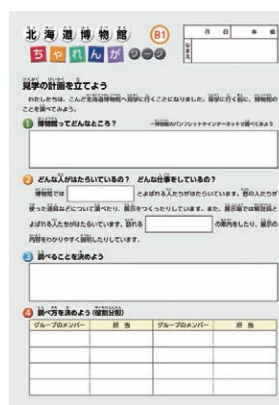
展示場で「調べ学習」を行う小学生

るところを見て帰るだけの学校もあります。見学時間の制約もあり、仕方がないのかもしれませんが、多くの先生方は、せっかくの博物館見学の機会に、しっかり展示を学ばせたいと考えているようです。博物館側で何か教材を用意してほしいという要望が、これまでしばしば寄せられました。そこで、学校向けのワークシートを新たに開発することになったのです。

ワークシートは、学習レベルに応じて数種類用意し、ウェブサイトからダウンロードできるようになっています。また、先生方自製のワークシートに使えるような、展示物・展示室図面の画像も用意しました。教材は年々充実させ、これからも学校教育との連携に力を入れていきたいと考えています。

（学芸部道民サービスグループ

学芸主査（教育普及） 東 俊佑）




開発したワークシート（ちやれんがワーク）

より利用しやすくなった北海道開拓の村

外国からの来村者が、楽しく・快適に北海道開拓の村を利用いただけるよう、平成29年度に開拓の村のインバウンド整備事業として施設整備を実施しました。この春から一般公開を行っています。

この整備事業では、大正期の酪農業の様子を伝える「旧小川家酪農畜舎」、明治期の新潟県からの移住者の生活文化を伝える「旧菊田家農家住宅」を改修しました。建物内部の展示を整備し、乳搾りの疑似体験や神楽の楽器体験などをおして、北海道の産業・生活文化を学ぶことができる体験ブースや体験教材を整えました。

村内の案内板・サイン等の改修と合わせて、Wi-Fi（無料）を整備しました。村内でインターネットの利用が可能となりました。これにより、スマート

フォンやタブレット端末のアプリ「Uni-Voice」、「ポケット学芸員」を利用して、歴史建造物の情報を多言語（6か国語）で発信できるようになりました。道内外はもとより、外国からの来村者にと

っても、北海道開拓の村をより利用しやすくなっています。

（総務部企画グループ

学芸主査 会田理人）



牧野を再現した旧小川家酪農畜舎

アイヌ民族文化研究センターだより

公開研究報告会「余市のアイヌ文化を考える」を開催しました

去る4月22日(日)、余市町中央公民館にて、余市町教育委員会との共催による公開研究報告会「余市のアイヌ文化を考えるー明治5年のクマ送り画を中心にー」を開催しました。

* * *

研究会の直接のきっかけになったのは、会のタイトルにもあるとおり、当館が寄贈を受けた、写真①の絵画です。

画の右上には「明治五年四月」「北海道後志国余市郡余市川村ニ於テアイヌ熊祭之真景」さらに「香仙筆」とあります

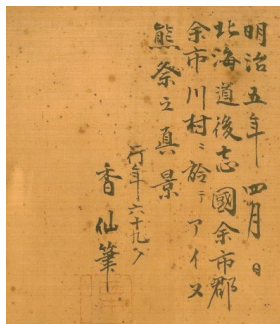
(写真②)。当館の三浦泰之学芸主幹の確認により、「香仙」は、元会津藩士で余市に移住し、のち札幌に住んで絵師としても剣豪としても知られた栗田鉄馬(1838～1917年)の号であること、また落款や筆跡も、既に知られている栗田のものに合致すると考えられることから、この画は、栗田鉄馬の作と思われる。

栗田の余市移住は1871(明治4)年。よいち水産博物館の浅野敏昭館長によれば、当時の余市郡には統計上の記録で3～400名のアイヌ人口があり、川村はその中でも比較的大きな集落の一つだったとのこと。そうすると、この画は栗田が実際に1872年に余市で見たアイヌのクマ送りの儀礼を描いたものと考えられます。「行年六十九」とありますので、栗田が満69歳であった1907(明治40)年頃に、当時の記憶をもとに、または何からの下絵をもとに描いたと推測できます。

絵画を見ていくと、右手奥に集落の様子(クマ檻も描かれています)が(写真③)、その手前にクマを遊ばせる場



写真① 熊祭之真景 全体



写真② 同部分 落款など



写真③ 同部分 集落の様子(右側にクマ檻)



写真④ 同部分 女性と子ども

面……と、クマ送りの儀式の一連の流れが比較的正確に描き分けられています。人々の表情の描写も豊かで、当時のアイヌ民族を描いた絵画にしばしば見られる、アイヌ民族をおしなべて三白眼で描くような偏見の要素は相対的には弱いようです。また、人々の衣服やさまざまな祭具などの描き方も細密で(写真④)、この絵画をもっとじっくり観察し、さらに関連する周辺の記録を調べていくことで、絵画の内容や当時の余市の様子などを、より詳しく知ることができそうです。

* * * * *

今回の研究会は、こうした問題関心を念頭に置きつつ、まずは、このような絵画があることを、この絵画についての“地元”である余市の皆様にお知らせすべく開催したものです。

会では、佐々木利和(当館非常勤研究職員)による基調報告に続き、五十嵐聡美氏(道立近代美術館)に絵画の特徴について、浅野敏昭氏(よいち水産博物館)に1872(明治5)年頃の余市について、そして三浦泰之学芸主幹に

は、絵画の作者である栗田鉄馬について、それぞれ報告していただきました。さらに当館の大坂拓研究職員による、大阪の国立民族学博物館が所蔵する余市の民具に関する概要の報告を行い、最後に前神奈川大学教授・田島佳也氏から総括コメントをいただきました。研究会の概要については、追って然るべきかたちでまとめる機会を持ちたいと考えています。

* * * * *

末尾になりましたが、この絵画の旧蔵者である故・遠藤佳都枝様に、この場を借りて改めて感謝申し上げます。また、この研究会は、サントリー文化財団の研究助成金により実施することができましたことを付記します。

(アイヌ民族文化研究センター長

小川正人)



写真⑤ 余市町での研究報告会

活動ダイアリー

2018年4月～6月(4/1～6/17)の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

4月6日(金)

■北海道開拓の村インバウンド交流施設整備事業施設内覧会を開催。

4月7日(土)

■総合展示室クローズアップ展示①～⑦を展示入替。

①巻物を読む／蝦夷国魚場風俗図巻、②新撰組の元幹部隊士 永倉新八、③山田秀三とアイヌ語地名を歩くー旭川ー、④文書や絵画に見るアイヌの芸能、⑤岩手県から北海道へ渡った神楽、⑥懐しのレコード、⑦「歩く宝石」オサムシ



■はっけんイベント「春の野幌森林公園 ポップアップカードをつくろう！」が開催。(～5月27日の土日祝振)



4月14日(土)

■自然観察会「エゾアカガエルのラブコールを聴こう」を開催。担当：堀繁久・水島未記・表溪太・鈴木あすみ・高橋治貴・小川由真・濱本真琴(自然ふれあい交流館)。

4月21日(土)

■古文書講座「ゆとり古文書講座(全3回)」第1回を開催。担当：東俊佑。

4月27日(金)

■第11回企画テーマ展「野幌森林公園いきもの図鑑」が開幕。(～6月3日(日))



4月28日(土)

■かるちゃんnet特別企画「てくてく、ぺったん！かるちゃんスタンプラリー」を共催。(～5月6日(日))

4月29日(日・祝)

■ハンズオン「蓄音機で音楽をきいてみよう」を開催。担当：尾曲香織・池田貴夫。

■ミュージアムトーク「野幌森林公園の花たち」を開催。担当：水島未記。

■屋上スカイビューを特別開放。

4月30日(月・振)

■ハンズオン「ヒグマの暮らし」を開催。担当：水島未記・表溪太。

■ミュージアムトーク「昭和の嫁入り道具」を開催。担当：尾曲香織。

■屋上スカイビューを特別開放。

5月3日(木・祝)

■ハンズオン「石器にさわってみよう」「ホンモノの貝の化石にさわってみよう！」を開催。担当：右代啓視・圓谷昂史。

■ミュージアムトーク「北海道林業を支えた道具」を開催。担当：青柳かつら。

■雨天により屋上スカイビューの特別開放を中止。

5月4日(金・祝)

■ハンズオン「ヒグマの暮らし」を開催。担当：水島未記・表溪太。

■ミュージアムトーク「野幌丘陵で発見されたステラ大カイクウ化石」を開催。担当：添田雄二。

■屋上スカイビューを特別開放。



5月5日(土・祝)

■ハンズオン「アンモナイトにさわってみよう！」「ホンモノの貝の化石にさわってみよう！」を開催。担当：栗原憲一・圓谷昂史。

■ミュージアムトーク「織田ステノさんとゴザ編みの近代」を開催。担当：奥田純己。

■屋上スカイビューを特別開放。

5月6日(日)

■ちゃれんが子どもクラブ「鳥を呼ぶバードコールをつくろう！」を開催。担当：表溪太・水島未記。

5月12日(土)

■センチュリーロイヤルホテル提供「松浦武四郎ランチ」(～6月30日)に協力。併せて、同ホテルで松浦武四郎紹介パネル展(～5月31日)を共催。

5月13日(日)

■ミュージアムカレッジ「のっぽろの森の生き物たち」を開催。担当：堀繁久・水島未記。

5月19日(土)

■自然観察会「落ち葉の下のカタツムリをさがそう」を開催。担当：堀繁久・水島未記・表溪太・高橋治貴・濱本真琴(自然ふれあい交流館)。

■古文書講座「ゆとり古文書講座(全3回)」第2回を開催。担当：東俊佑。

5月20日(日)

■ミュージアムカレッジ「民具の変化からみる近現代のアイヌ文化ー荷縄」を開催。担当：大坂拓。

5月26日(土)

■総合展示室クローズアップ展示①～⑦を展示入替。

①巻物を読む／蝦夷風俗図巻、②新撰組永倉新八の養父松前藩医杉村介庵



5月30日(水)

■館内定例研究報告会を開催。各研究グループから年度計画を発表。

6月1日(金)

■北海道博物館赤れんがサテライトでパネル展「北海道の名付け親・松浦武四郎」を開催。(～8月26日(日))

6月2日(土)

■はっけんイベント「ほいホー磁針をつくろう！」が開幕。(～7月29日の土日祝)



6月3日(日)

■ちゃれんがワークショップ「縄文土器をつくる(全2回)」第1回「つくる」を開催。右代啓視・鈴木琢也。

6月8日(金)

■平成30年度第1回北海道立総合博物館協議会を開催。

6月10日(日)

■講演会「昆虫写真家 海野和男の生きものの写真のスズメ」を開催。講師：海野和男氏(生きものの写真リトリック実行委員長)。

6月16日(土)

■古文書講座「ゆとり古文書講座(全3回)」第3回を開催。担当：東俊佑。

6月17日(日)

■ミュージアムカレッジ「アイヌの子守歌・諸民族の子守歌」を開催。担当：甲地利恵。

人事異動

< >は前職

退職(3月31日付) <副館長>：梅木克也、<学芸部道民サービスグループ兼研究部博物館研究グループ学芸員>：小林孝二、<学芸部道民サービスグループ解説員>：青木朱美、<学芸部道民サービスグループ解説員>：埴見裕子/転入(4月1日付) 副館長：山中剛、総務部総括グループ主査：古野健太郎/転出(4月1日付) <総務部総括グループ主査>：中野淑行/新任(4月1日付) 学芸部博物館基盤グループ兼研究部博物館研究グループ学芸員：鈴木あすみ、学芸部道民サービスグループ兼アイヌ民族文化研究センター学芸員：丸丸由紀子、学芸部道民サービスグループ兼研究部博物館研究グループ研究職員：鈴木明世

来館者数

○2018年3月
総合展示室 3,590人 特別展示室 3,561人 はっけん広場 1,044人
○2017年度合計
総合展示室 80,519人 特別展示室 44,472人 はっけん広場 20,198人
○2018年4月～5月
総合展示室 14,420人 特別展示室 12,183人 はっけん広場 3,281人
○累計(2015年4月～2018年5月)
総合展示室 352,359人 特別展示室 248,611人 はっけん広場 85,729人

森のちゃれんがニュース 第12号

発行日：2018年7月27日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2018